

茨城県統計協会の歩み

1 茨城県統計協会の設立

大正 15 年 7 月に郡制が廃止されると、それまで郡役所が行っていた統計事務を市町村が担うこととなった。当時は、農作物や工業製品の生産量等の調査方法について明確な規定がなく、郡あるいは市町村の実情に即して様々な方法により調査が行われていたため、各郡の単位で市町村が相互連絡・技術向上を目指して研究会を組織する動きが増えていた。

同じ大正 15 年 7 月に、県では知事官房統計「係」が独立して拡充強化され統計「課」となった。県としても中央省庁から委託される各種統計調査について、統一的、体系的な統計調査の方法を確立するよう努めていた。また、全国的には、大正 9 年から始まった国勢調査や、農林業関係の調査として初めて全数調査となった昭和 4 年農業調査などの大規模な調査を迎えて、統計調査についての知識普及や事務の改善を助成する機関として、府県単位の統計協会を設立する動きが増えてきていた。

昭和 8 年 6 月になると、行方郡統計事務研究会が開催した行方郡統計大会において、県統計協会設立の決議がなされ、他の各統計事務研究会の同意を添えて知事に請願を行った。

県は、国勢調査を翌年に控え、統計協会設立の機運が高まったとして、380 全市町村の同意を得た後、昭和 9 年 10 月 8 日に県庁内参事官室

において茨城県統計協会創立総会を開催し、総裁（知事）、会長（官房主事）、副会長（統計課長）、評議員（町村長 7 名）、幹事（若干名）の役員を選任、茨城県統計協会が設立された。当時の記録によると全都道府県で 19 番目の設立であった。

統計協会は県統計課内に事務局を置き県職員が兼務するとともに、嘱託として元新聞記者 1 名を採用した。



茨城県統計協会創立総会（昭和 9 年 10 月 8 日）

2 戦前の主な事業

統計協会は、「統計事務の刷新改善、統計知識の普及向上並びに統計の民衆化を図る」ことを目的とし、各郡市統計事務研究会（統計事務研究会のない郡は町村会）を会員として、統計思想の普及、統計事務の実地指導、統計図書及び用紙の印刷、統計功労者の表彰等の事業を行った。

昭和 10 年 1 月に機関紙「茨城統計」を創刊し、県下 380 市町村（市町村の統計調査員が約 3,900 名）のほか、県下各種団体、企業及び中央省庁、他府県等に配布した。記事には統計調査の結果や論文、統計関係の動向のほか、県内外から投稿された統計に関する俳句・川柳も掲載して隔月発行とした。

また、映写機を購入して各市町村（小学校等を会場）を巡回し統計映画講話会を開催したところ、1 会場あたり 500～1,000 人程度が参加して好評を博したようである。

統計事務の実地指導では、市町村の統計担当者等を集めて座談会や県内外の先進地視察なども行った。市町村書記及び統計調査員等の統計功労者に対しては、大臣表彰、知事表彰と併せて、統計協会総裁（知事）名で表彰を行った。

これらの活動の事業費については、市町村人口割による会費及び出版物収入（広告費を含む）のほか、設立時には民間企業等からの寄付金も765円が寄せられている。昭和10年度の決算では歳出合計5,891円37銭となっている。（日銀の企業物価戦前基準指数によると、令和5年現在の価値で約530万円程度と見られる。）

昭和14年の三重県統計協会創立十周年記念・三重県統計大会とともに実施された全国都道府県統計課長・同協会長会議には本県・協会からも出席し、統計事務改善案等を協議している。

その後、第二次世界大戦下において印刷用紙の確保も難しくなり、機関紙の「茨城統計」の発行は昭和15年3月で中断し、統計協会の状況も詳しくはわからなくなっている。



茨城統計 創刊号表紙
(昭和10年1月15日発行)

3 統計協会の再建

戦後、連合軍総司令部（GHQ）の指導の下に、中央、地方の統計機構の整備が始まった。

昭和22年4月には、初の県知事選挙と県議会議員選挙が実施、5月に統計法の施行、7月に「地方統計機構整備要綱」が閣議決定され、都道府県や市町村の統計組織も再建された。茨城県統計協会もこの頃に再建されたようである。

茨城県ほか数名の都道府県統計課長を中心に統計協会全国組織結成の運動を行った結果、昭和25年2月に財団法人全国統計協会連合会が結成され、同年12月に第1回全国統計大会が開催されている。

茨城県統計協会は、県と共催で昭和23年に第1回目の「調査統計展覧会」を開催し、翌24年には「統計調査員大会」をいずれも国に先駆けて開催している。

昭和24年1月に新聞形式の「月刊調査茨城」（後に「いばらき統計だより」と名称変更、昭和48年以降は県費で発行）を創刊し、市町村及び統計調査員ほかに統計に関するニュースを提供した。昭和28年1月には戦前の機関紙「茨城統計」を「茨城調査時報」と名称を変えて復刊し、各種統計調査の結果や論文等を掲載した（昭和33年に「統計茨城」、昭和52年に「統計いばらき」と名称を変更し令和5年度まで発行された）。

昭和24年に統計協会はジープを購入し、翌25年の国勢調査等の実施に機動力を発揮した（昭和29年にトヨペットに買い替え）。

昭和25年（1950年）に行われた世界農業センサス、国勢調査、工業センサスにたずさわった統計関係者の拠出金によって、昭和27年3月に「1950年センサス記念統計館」を水戸市南三の丸（現在の水戸市三の丸一丁目）に竣工した。この記念館は統計関係の資料の保存と閲覧、統計関係会議の会場、統計関係者の宿泊設備機能を持った全国的にも珍しい施設であったが、その後県に移管され昭和42年に廃止されるまで幅広く利用された。

4 第一の転換期 ～昭和の市町村合併～

昭和28年10月に町村合併促進法が施行されて合併が進み、法施行前に4市54町308村だったものが、昭和31年9月には15市41町44村となり、全国でも有数の合併実績となった。

新市町村は、膨らむ行政需要に対処するため歳出の抑制を図り、市町村から県や各種団体へ

の負担金及び寄附金の廃止や減額の運動を進めた。このため県統計協会の負担金は減少し、県の行政機構の改革によって有名無実となっていた郡支部を廃止とするなどの運営方法改善、合理化を行った。

こうした中、昭和 31 年 4 月には県内 14 市の統計職員による統計事務研修会（後、茨城県都市統計事務協議会）が結成され、都市統計書の研究・発行などを始めた。昭和 32 年には水戸地方、土浦地方、下館地方統計事務連絡協議会が結成されるなど、新たな地域組織が誕生し、茨城県統計協会でもこれらの市郡統計事務協議会（研究会）と協力しながら統計思想の普及と調査統計技術の改善向上に努めることとなった。（昭和 62 年時点で 14 団体があった。）

昭和 40 年代の高度成長期になると、社会の複雑多様化、労働力不足などから統計調査員の選任が難しくなってきた。このため、調査員の連帯感を深め、知識の普及向上を図るよう市町村ごとの調査員組織の結成や運営に対する支援を行うとともに、統計調査員に対する研修会を開催するようになった。

また、一般の企業や個人を賛助会員として募集し、会費を徴収して統計年鑑等の図書の配布を開始した（現在の特別会員）。

5 第二の転換期 ～平成の市町村合併およびインターネットの普及～

地方分権の推進や少子・高齢化の進展、国・地方を通じた財政の著しい悪化など市町村行政を取り巻く情勢が大きく変化する中、平成 7 年 4 月の市町村合併特例法によって、市町村の自主的な合併が促進されるようになると、県内の市町村数は法施行前の 19 市 43 町 24 村から、平成 18 年 4 月には 32 市 10 町 2 村と半減した。市町村数の減少と市町村負担金審議会からの要請等によって、県統計協会の市町村会費も減少が続いた。

さらにインターネットの普及に伴い、平成 11 年 8 月から県のホームページでも統計情報提供が開始されるなど、統計データの入手が容易になったことなどから特別会員の退会も増えてきた。

全国でも、財政状況の悪化、団体への関与見直しなどから統計協会を解散する都道府県も出てきたうえ、全国組織である（財）全国統計協会連合会も平成 21 年度末で解散した。

単身世帯や共働き世帯の増加やプライバシー意識の高まりなど統計調査環境は厳しさを増しているところであり、郵送回答やインターネットによる調査の導入など、調査手法も見直しが行なわれている中、茨城県統計協会では、平成 23 年度に各市町村の意見を聞き取りながら統計協会の在り方について検討した結果、統計協会の目的は引き続き重要であるとして、一部事業の廃止などの改革を実施し事業を継続していくこととした。

6 主な事業のあゆみ

（1）統計協会総裁表彰

多年統計調査に従事し、功績のあった統計調査員等の功労に報いるため、統計協会総裁（知事）名での表彰を、統計協会の設立時から行っている。

昭和 34 年の第 1 回統計大会（平成 20 年度から統計功労者表彰式）以降令和 5 年度までの累計で統計調査員 7,171 名、市町村職員 375 名、県職員 87 名を表彰した。

また、一定期間以上勤務し退職した統計調査員（毎年 100～200 名程度）に対して、感謝状を贈呈している。

さらに、統計グラフコンクールの優秀作品に対しても表彰を行っており、昭和 34 年以降の累計で、統計協会総裁名で児童・生徒約 2,200 名余と優秀校約 600 校、指導者約 200 名余を表彰している。

(2) 統計教育（統計グラフコンクール）

昭和 22 年に文部省の助言により、各県の統計主管課が「教育調査研究校」という名称で統計教育の研究を小中学校数校に委嘱するようになった。本県においても調査課（現統計課）が研究校の委嘱を行い、昭和 24 年に県教育委員会ができてからは協力して統計教育を推進することとなった。昭和 29 年からは「統計教育研究指定校」と名称変更。昭和 36 年からは、教育庁指導課が主管課となって統計教育研究校を指定、各校が独自の統計研究を行うようになった。統計協会も引き続いて「統計教育推進校」に対する支援を行い、昭和 60 年度まで続いた。

昭和 23 年に県調査課と統計協会は第 1 回茨城県調査統計展覧会を開催し、一般県民や学生による図表を展示した。展覧会は後に調査統計図表展、統計グラフコンクールとなり、統計教育の成果を示す場所の一つとなっている。やや遅れて全国統計グラフコンクールも始まり、県の優秀作品の中から出品するようになった。

昭和 37 年に、県内の小中学校教諭の組織する県教育研究会の中に統計教育研究部が設けられ、統計課と統計協会、教育委員会、統計教育研究部が協力して統計グラフの指導者講習会、作品審査、表彰、展示など各種事業を行うようになった。

この結果、昭和 38 年には全国コンクールで特選を取るなどの成果が上がり、統計グラフコンクールへの応募作品数は年々増加、昭和 58 年度からは 11 年連続で 1 万点を超えた。平成 12 年度から平成 29 年度までは 18 年連続で全国コンクールで特選を受賞、その後も数多くの作品が輝かしい成績を収めている。

茨城県教育研究会統計教育研究部はこれらの成果が高く評価され、平成 12 年に我が国の統計界の最高の栄誉とされる大内賞を、団体としては初めて受賞した。

現在は、少子化などで応募数は減少してきたものの、全国的に見ると多くの作品が応募されており、平成 6 年度から令和元年度までの 26 年間は応募作品数日本一、令和 3 年度以降も応募作品数は全国上位となっている（令和 2 年度は全国コンクールの開催なし）。



統計グラフコンクール入選作品展

(3) 県民手帳の発行

県統計協会においては各種統計図書を発行しているが、最も発行部数が多く県民に親しまれているのは県民手帳である。

県民手帳の初期の現物は残されていないが、昭和 30 年度の統計協会予算書には県民手帳を一冊あたり 55 円で 8,000 部販売すると記載がある。また、「茨城調査時報」昭和 32 年 9 月号によると、昭和 33 年版の県民手帳は一冊 80 円で内容は約 200 ページ、統計資料篇などがあり、ほぼ現在と同じ形式のようである。

昭和 45 年版では 50,000 部を発行し、昭和 58 年版からは従来のサイズ（横 7.0cm×縦 12.0

cm) の外に大型版（現在のコンパクト判）を、平成 16 年版からはさらに大型のデスク版（現在の A 5 判）を追加し、平成 30 年まで 3 サイズで販売した。

県民手帳は県統計協会と市町村窓口によって販売されていたが、その後県庁生活協同組合、大型書店などにも販売委託し、平成 11 年からは県内一般書店で、さら現在ではホームセンターやコンビニエンスストアなどへも販売を委託している。

その後も手帳利用者へのアンケート結果や他の都道府県の状況をふまえて、種類や収録内容の見直しを重ねており、2021 年版からは新たに西ノ内和紙を表紙に使用した「和紙判」、2024 年版からは県内名所の写真を表紙に使用した「写真判」を追加して好評を得ているほか、県内のみにとどまらず県外・国外からも購入希望があるなど、県民手帳は統計データとともに多くの人々に親しまれ続けている。



県民手帳（2024 写真判・和紙判）

参考文献

茨城統計（昭和 10 年～昭和 15 年）

茨城調査時報（昭和 28 年～昭和 32 年）

統計茨城（昭和 33 年～昭和 50 年）

統計いばらき（昭和 51 年～）

月刊調査茨城（昭和 24 年～昭和 33 年）

いばらき統計だより（昭和 34 年～）

茨城県統計大会プログラム（昭和 34 年度～）

茨城県統計協会事業概要（昭和 61 年度～）

茨城県統計協会 60 周年記念誌（平成 7 年 3 月）

茨城県統計協会 70 周年記念誌（平成 16 年 12 月）

茨城県統計協会 80 周年記念誌（平成 26 年 12 月）

「四十年のあゆみ」（財）全国統計協会連合会（平成 2 年 6 月）

「五十年のあゆみ」（財）全国統計協会連合会（平成 12 年 8 月）

三重県統計協会創十周年記念 三重県統計大会録（昭和 15 年 7 月）

佐藤正弘「戦前日本の統計編成業務と行政資料」、清川雪彦・王健「戦前日本の地方統計組織の成立と統計調査員制度」一橋大学経済研究所